高校教員はどのような学生時代を送っていたのか

― 世代間の差異に着目して ―

葛木　浩一*

1．はじめに

本稿の目的は，高校教員を対象とした調査に基づき，高校教員が学生時代にどのようなキャンパスライフを送っていたのかについて，特に日常生活，大学の授業に対する認識・態度，大学教員との関わりの三点から明らかにすることにある。

2009年夏の総選挙における民主党のマニフェストは，教育界に大きな波紋を呼んだ。そのひとつが，教員養成課程を現行の4年制から6年制にするというものである。この教員養成課程6年制については批判が相次ぎ，2010年夏の参院選における民主党のマニフェストでは明示されていない。しかし，民主党は依然として教員養成課程の期間を延ばす姿勢を変えてはいないようである。

教員養成課程6年制に対する批判として多くみられたのが，教員を志望する学生の経済的負担増と，それに伴う教員を志望する学生の減少及び資質の低下に対する危機感である。このうち，教員を志望する学生の経済的負担増と学生の減少については，客観的な値として捕捉することが可能であるが，資質の低下についてはそれが困難である。教員養成課程が6年制になるにしても，教員養成課程の期間が延長されるにしても，その結果として，教員を志望する学生の資質がどのように，あるいはどの程度変容したのかを明らかにすることは非常に重要であると考える。

なお，教員を志望する学生の資質については，比較的多くの先行研究で言及がなされている。例えば，葛城（2005）は，非教員養成系学部において教員を志望する学生と志望しない学生，あるいは教員免許を志向する学生と志向しない学生の違いについて分析した結果，「教員を志望している学生は，それ以外の学生よりも概して大学での学習に肯定的で真面目に取り組んでおり，教員を志望していなくても，教員免許を志向している学生は，そうでない学生よりは大学での学習に肯定的で真面目に取り組んでいる」（葛城 2005: 22頁）ことを明らかにしている[1]。

このように，先行研究では，教員を志望する学生と志望しない学生で，その資質に違いがみられることが明らかにされている。ただし，調査方法や調査項目，あるいは調査対象（学校種）等がそれぞれ異なるため，時代によって教員を志望する学生の資質にどの程度の違いがみられるのかについては十分に明らかにされているわけではない。こうした点について明らかにするためには，同一の調査枠組みのもとで，分析を行う必要がある。

そこで，本稿では，高校教員を対象とした調査に基づき，年齢層別の分析を行うことで，時代によって教員を志望する学生の資質にどの程度違いがみられるのかについて検討する。具体的には，日常生活，大学の授業に対する認識・態度，大学教員との関わりの三点から，時代によって教員を志望する学生のキャンパスライフにどの程度違いがみられるのかについて明らかにしたいと考える。

* 香川大学大学教育開発センター准教授

2．研究の方法

分析に用いるデータは「高校からみた大学に関する意識調査」（研究代表者：有本章）である。調査は2009年11月から2010年2月にかけて，全国の国公私立高等学校の中から無作為に1,715校を抽出し，各校へ1枚ずつアンケート用紙を配布した。なお，回答にあたっては，各校の「進路担当」である教員1名に対象を絞って依頼した。有効回答数は325名であり，回収率は18.0%である。

3．高校教員の学生時代

3－1．日常生活

まず，高校教員が学生時代にどのような日常生活を送っていたのかについて概観したい。表1は，以下に示す各項目について，「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4段階でたずねた結果を示したものである。

この結果をみると，高校教員は学生時代，非常にまじめであったことがうかがえる。すなわち，「専門書をよく読んだ」に「とてもあてはまる」と回答したものは25.5%であり，これに「少しあてはまる」を加えると，75%を越える。一方，「最新の流行はすぐに取り入れていた」に「とてもあてはまる」と回答したものは2.8%しかおらず，「少しあてはまる」を加えても20%に満たない。

また，高校教員はキャンパスライフを比較的順調に過ごしていたこともうかがえる。すなわち，「大学をやめたいと思うことがあった」「経済的に大学に通い続けることが難しかった」に「とてもあてはまる」と回答したものは3%前後であり，「少しあてはまる」を加えても15%に満たない。

表1．高校教員の学生時代の日常生活

	とても あてはまる	少し あてはまる	あまりあて はまらない	全くあて はまらない	合計
専門書をよく読んだ	25.5	49.7	21.7	3.1	100(318)
最新の流行はすぐに取り入れていた	2.8	15.0	57.7	24.5	100(319)
大学をやめたいと思うことがあった	2.8	9.7	22.5	65.0	100(320)
経済的に大学に通い続けることが難しかった	3.4	10.9	30.6	55.0	100(320)

注：値は割合。括弧内は実数。以下，同様に表記。

3－2．大学の授業に対する意識・態度

次に，高校教員が学生時代に大学の授業に対し，どのような意識・態度でのぞんでいたかについて概観したい。表2も表1と同様，以下に示す各項目について，「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4段階でたずねた結果を示したものである。

この結果からも，高校教員が学生時代，非常にまじめであったことがうかがえる。すなわち，「授業はできるだけ休まないようにしていた」「成績はできるだけA（優）を取ろうとしていた」に対する肯定的な回答の割合は高く，特に前者に「とてもあてはまる」と回答したものは41.6%であり，これに「少しあてはまる」を加えると，75%を越えている。一方，「授業中に私語をすることが多かった」「卒業に必要無い授業は履修しないようにしていた」に対する肯定的な回答の割合は低く，特に前者に「とてもあてはまる」と回答したものは0.9%しかおらず，「少しあてはまる」を加えても6%程度に過ぎない。

また，高校教員は学生時代，大学の授業を非常に肯定的に捉えていたこともうかがえる。すなわち，「大学の授業では幅広い知識を得られたと思う」「大学の授業では専門的知識を得られたと思う」

「授業で考え方が変化したことがあった」に対する肯定的な回答の割合は高い値を示している。特に「大学の授業では専門的知識を得られたと思う」に「とてもあてはまる」と回答したものは36.9%であり，これに「少しあてはまる」を加えると，88%に達する。一方，「大学の授業は役に立たないと思っていた」に「とてもあてはまる」と回答したものは1.9%しかおらず，「少しあてはまる」を加えても20%に満たない。

表2．高校教員の学生時代の大学の授業に対する意識・態度

	とても あてはまる	少し あてはまる	あまりあて はまらない	全くあて はまらない	合計
授業はできるだけ休まないようにしていた	41.6	35.3	19.4	3.8	100(320)
成績はできるだけA(優)を取ろうとしていた	29.6	36.8	28.3	5.3	100(318)
授業中に私語をすることが多かった	0.9	5.3	35.9	57.8	100(320)
卒業に必要無い授業は履修しないようにしていた	3.1	14.7	47.2	35.0	100(320)
大学の授業では幅広い知識を得られたと思う	22.5	50.0	26.3	1.3	100(320)
大学の授業では専門的知識を得られたと思う	36.9	51.3	11.3	0.6	100(320)
授業で考え方が変化したことがあった	18.4	45.9	31.3	4.4	100(320)
大学の授業は役に立たないと思っていた	1.9	17.8	49.4	30.9	100(320)

3－3．大学教員との関わり

最後に，高校教員が学生時代に大学教員とどの程度の関わりをもっていたのかについて概観したい。表3も，以下に示す各項目について，「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4段階でたずねた結果を示したものである。

この結果をみると，高校教員は学生時代，大学教員と授業以外の場所での関わりを比較的もっていたことがうかがえる。すなわち，「授業以外の時に，教員と研究や学問の話をした」「大学教員と一緒に食事やお酒を飲みに行った」に「とてもあてはまる」と回答したものは25%前後であり，これに「少しあてはまる」を加えると70%程度になる。ただし，「勉強や進路以外の生活の悩みについて大学教員に相談をした」に「とてもあてはまる」と回答したものは5.3%であり，「少しあてはまる」を加えても20%である。この点に鑑みれば，大学教員との授業以外の場所での関わりは，あくまで研究や学問の延長線上の話であり，プライベートの領域に及ぶものではないことがわかる。

表3．高校教員の学生時代の大学の教員との関わり

	とても あてはまる	少し あてはまる	あまりあて はまらない	全くあて はまらない	合計
授業中に、大学教員に質問をした	10.6	39.4	36.3	13.8	100(320)
授業以外の時に、教員と研究や学問の話をした	24.1	43.4	22.8	9.7	100(320)
大学教員と一緒に食事やお酒を飲みに行った	28.8	43.8	16.3	11.3	100(320)
勉強や進路以外の生活の悩みについて大学教員に相談をした	5.3	14.7	41.6	38.4	100(320)

4．高校教員が学生時代におかれていた時代状況

前節では，高校教員は学生時代，キャンパスライフを比較的順調に過ごしていたこと，また，非常にまじめであり，大学の授業も非常に肯定的に捉えていたこと，大学教員と授業以外の場所での関わりを比較的もっていたことが確認された。

しかし，こうした高校教員の学生時代の日常生活，大学の授業に対する認識・態度，大学教員との関わりは，年齢層によって異なるものと考えられる。なぜなら，年齢層によって大学進学率や教員採用試験の競争率などが異なるため，時代状況によって高校教員の資質が大きく異なってくることが予想されるためである。例えば，吉澤ら（2010）は，小・中学校教員を対象とした調査に基づき，「20 歳代はアルバイトに勤しみ流行のファッションを気にしたが，年長世代に比べコンパなどには消極的」であることを明らかにしている。

そこで，以下の分析では，高校教員の年齢層を分析の視角としたい。年齢層は，50 歳以上の「ベテラン層」，40－49 歳の「中堅層」，39 歳未満の「若手層」の３層とする。本稿の分析対象者が仮に浪人や留年をしなかったと仮定するならば，学生時代を過ごしたのは，「ベテラン層」が 1970 年代，「中堅層」が 1980 年代，「若手層」が 1990 年代となる。各層のサンプル数については，表４に示す通り，「ベテラン層」が 112 名，「中堅層」が 155 名，「若手層」が 50 名である。

なお，比較対象として，2000 年代に学生時代を過ごしている教員を志望する学生（以下では「教員志望学生」と表記）の値を示す。分析に用いるデータは「大学生の学習経験・生活に関する調査」（研究代表者：有本章）である。調査は 2008 年 11 月から 2009 年２月にかけて，中国，四国，関西地方に所在する 11 大学（私立大学６校，国立大学４校，公立大学１校）の学生を対象に実施した。有効回答数は 4,363 名である。本稿では，高校教員を多数輩出する偏差値 55 程度の中堅国立 H 大学の３年生で，教員を志望している 239 名のサンプルを用いる。

表４．分析対象者の年齢層

24－29歳	30－34歳	35－39歳	40－44歳	45－49歳	50－54歳	55歳以上	合計
2	17	31	53	102	71	41	317
0.6	5.4	9.8	16.7	32.2	22.4	12.9	100.0

若手層	中堅層	ベテラン層	合計
50	155	112	317
15.8	48.9	35.3	100.0

以下では，年齢層別の分析に入る前に，大学進学率と教員採用試験の競争率の推移を概観しながら，各年齢層の高校教員が学生時代におかれていた時代状況について整理しておきたい。

４－１．大学進学率

図１は，大学進学率の推移を示したものである。「ベテラン層」が学生時代を過ごした 1970 年代は，マス化が加速度的に進行していった時期にあたる。すなわち，大学進学率は 1970 年の 17.0% から 1976 年には 27.6%と 10%以上も上昇した。こうした急激なマス化の進行に伴って，高等教育労働力の供給は爆発的に拡大していったが，大学卒業という学歴に見合った職業機会の需要は既に満たされていた。そのため，1970 年代に入ると，企業は大卒の大量採用を行い始め，大卒者の「大衆的」サラリーマン化が進行した。「学歴ラダーの下降現象」や「大卒のブルーカラー化」と呼ばれるこうした現象によって，大学教育と新規学卒労働市場間のレリバンスは非常に希薄なものと化してしまった。それはまた，学習への主要なインセンティブのひとつが消滅したことを意味するものであった。すなわち，「ベテラン層」が学生時代を過ごした 1970 年代は，それまでまがりなりにも学習に向けられてきたエネルギーが余暇的生活に向けられることになった時期にあたる。

こうした状況は，「中堅層」が学生時代を過ごした 1980 年代以降顕著なものとなる。この時期，大学進学率は 25%前後で推移していたにもかかわらず，「大学のレジャーランド化」がしきりにいわれていた。こうした背景には，大学教育と新規学卒労働市場とのレリバンスがさらに希薄化していったことが大きく関係していると考えられる。特に 1980 年代後半はバブル景気であり，就職状

況は極めて良好で，「内定切り」や「内定病」という言葉が生まれるほどの内定乱発がみられた。つまり，当時は大学に入学してしまいさえすれば，学習の出来不出来を問わず，卒業はおろか就職ができてしまう状況にあった。そうした状況下にあって，学生の学習へのインセンティブはさらに低まることになり，その分のエネルギーが余暇的生活にさらに向けられることになっていった。すなわち，「中堅層」が学生時代を過ごした1980年代は，学生が学生生活を謳歌すべく正課外の活動に多くの時間をあて，本分であるはずの学習に対して真剣に取り組まなくなっていった時期にあたる。

「若手層」が学生時代を過ごした1990年代は，20年余り25%前後で推移してきた大学進学率が再び上昇を始めた時期にあたる。すなわち，大学進学率は1990年の24.5%から1999年には38.1%にまで達している。こうした進学率の増加に伴い，学生の学力の低下現象が顕著に表面化し，専門教育を受けるのに必要な学力が身についていない，あるいは専門教育を受けるのに必要な科目を履修していない，そうした学生が大学に入学してくるようになった。このように，学力低下現象が顕著に表面化してきたことを背景に，これまでの大学教育の枠組みの限界が浮き彫りにされていく中で，多様な教育改革が推し進められることになった。そしてそれと軌を一にして，学生の学習への関心が高まりをみせ始めた。その直接的な要因は，バブル崩壊による就職状況の悪化にあると考えられる。しかし，そこで生じた学習への動機づけを後押しする大学側の取り組みによって，学生の学習への関心が維持・強化された側面も無視できない。すなわち，「若手層」が学生時代を過ごした1990年代は，それまでとは異なり，学生の学習への関心が高まりをみせ始めた時期にあたる。

なお，「教員志望学生」が学生時代を過ごしている2000年代には，大学進学率が2000年に40%台に達して以降も上昇を続け，2009年には遂に50%に達した。すなわち，トロウの発展段階説に照らせばユニバーサル段階に突入したわけであり，いよいよ大学へ進学するのが「義務」と感じられる時代が幕を開けたのである。こうした状況下では，さらに教育改革の必要性が叫ばれるわけであるが，2000年頃から始まる教育改革では，国民経済全体と政府の費用負担能力に厳しい制約が生じている中で，大学教育の不断の改善や社会に対する説明責任を果たすべく，教育評価が強く求められるようになってきた。ただ教育改革を行えばよいというのではなく，その効率性や実効性が問われるようになってきたのである。すなわち，「教員志望学生」が学生時代を過ごしている2000年代は，効率性や実効性を高めるための多様な教育改革が加速度的に推し進められているため，学生の学習への関心は高められやすい状況にあるといえる。

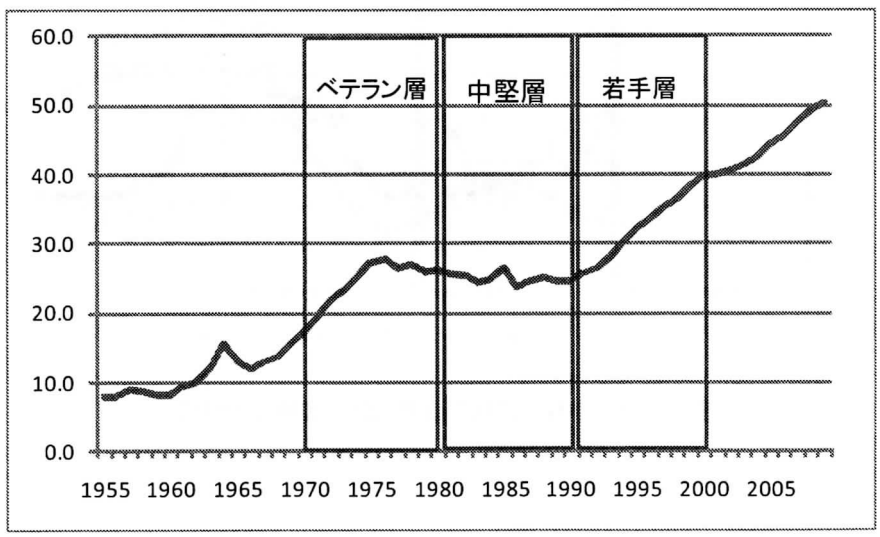

図1．大学進学率の推移

４－２．教員採用試験の競争率

図２は，公立学校教員採用選考試験の競争率を示したものである。「ベテラン層」が学生時代を過ごした 1970 年代は，高校教員の競争率が比較的高かった時期にあたる。文部省の調査が始められたのが 1979 年であるため，1979 年の値しか示すことができないが，1979 年の時点では 10 倍を越える高い競争率であることが確認できる。先述のように，1970 年代は，学習への主要なインセンティブのひとつが消滅したことで，それまでまがりなりにも学習に向けられてきたエネルギーが余暇的生活にむけられることになった時期にあたる。しかし，競争率が非常に高かったことから，高校教員を志望する学生にとっては，そうした高い競争率が学習への主要なインセンティブとして引き続き機能していたのではないかと推察される。

「中堅層」が学生時代を過ごした 1980 年代は，高校教員の競争率が比較的低かった時期にあたる。1979 年に 10 倍を越えていた競争率は，1980 年には８倍程度にまで低下し，1985 年には５倍を切っていることが確認できる。翌 1986 年には６倍程度には上昇したものの，その後 1980 年代を通して横ばい傾向にある。先述のように，1980 年代は，学生が学生生活を謳歌すべく正課外の活動に多くの時間をあて，本分であるはずの学習に対して真剣に取り組まなくなっていった時期にあたる。こうした状況に加え，競争率が比較的低かったことから，高校教員を志望する学生であっても学習に対する関心は低かったのではないかと推察される。

「若手層」が学生時代を過ごした 1990 年代は，高校教員の競争率が高まった時期にあたる。1980 年代後半には６倍程度で横ばい傾向にあった競争率は，1990 年代に入ると徐々に上昇を始め，1996 年には再び 10 倍を越え，1999 年には 11.9 倍にまで達している[2]。先述のように，1990 年代は，学生の学習への関心が高まりをみせ始めた時期にあたる。その直接的な要因が就職状況の悪化であったことに鑑みれば，競争率の高い高校教員を志望する学生であれば当然学習への関心が高かったものと推察される。

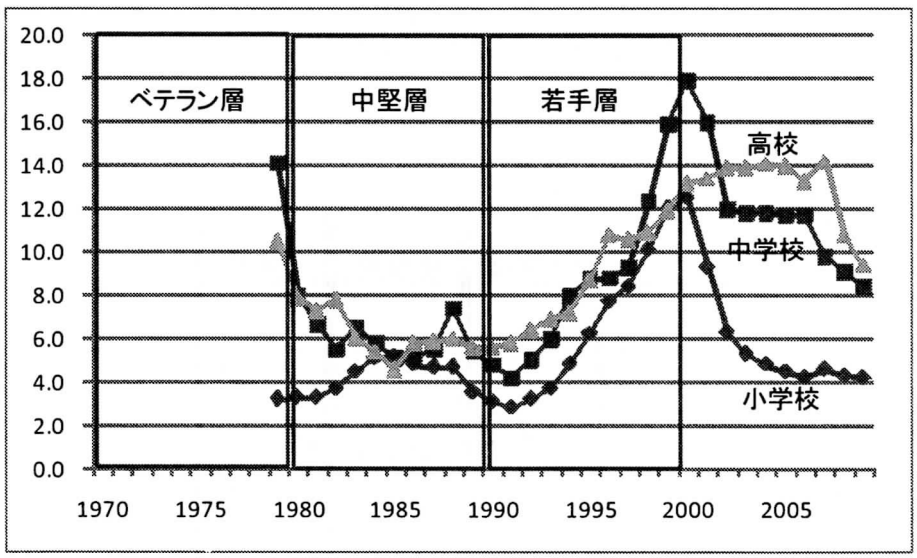

図２．公立学校教員採用選考試験の競争率の推移

なお，「教員志望学生」が学生時代を過ごしている2000年代には，さらに競争率が上昇し，2000年に13倍を越えた後，2007年には14.2倍にまで達している。その後は急激に値を下げ，2008年には10.8倍になり，2009年には再び10倍を切っているものの，依然として高い水準にはある。先述のように，2000年代は，効率性や実効性を高めるための多様な教育改革が加速度的に推し進められているため，学生の学習への関心は高められやすい状況にある。競争率が依然として高い水準にあることをあわせ鑑みれば，高校教員を志望する学生の学習への関心は高いものと推察される。

5．年齢層別にみた高校教員の学生時代

5－1．日常生活

まず，高校教員の学生時代の日常生活が，年齢層によってどの程度異なるのかについて検討したい。表5には，高校教員の学生時代の日常生活と年齢層とのカイ二乗検定を行った結果を示している。ひとつの項目を除き有意差が確認できないことから，高校教員の学生時代の日常生活に，年齢層による大差はないといえる。しかし，以下ではあえて年齢層による傾向を抽出してみたい。

表5をみると，「中堅層」の教員は，「ベテラン層」や「若手層」の教員に比べれば，学生時代，そうまじめではなかったという傾向がうかがえる。すなわち，「専門書をよく読んだ」に肯定的な回答をしたものの割合は，「ベテラン層」や「若手層」よりも「中堅層」で低い値を示している。一方，「最新の流行はすぐに取り入れていた」に肯定的な回答をしたものの割合は，「ベテラン層」や「若手層」よりも「中堅層」で高い値を示しており，有意差も確認できる（$P<0.01$）。前節では，「（「中堅層」が学生時代を過ごした1980年代は）高校教員を志望する学生であっても学習に対する関心は低かったのではないか」と言及したが，そうした言及を支持する結果であるといえよう。

また，「中堅層」の教員は，「ベテラン層」や「若手層」の教員に比べれば，学生時代，キャンパスライフを比較的順調に過ごしていたという傾向もうかがえる。すなわち，「大学をやめたいと思うことがあった」に肯定的な回答をしたものの割合は，「ベテラン層」や「若手層」よりも「中堅層」で低い値を示している。ただ，「経済的に大学に通い続けることが難しかった」に肯定的な回答をしたものの割合は，「ベテラン層」や「若手層」よりも「中堅層」で低い値を示しているわけではなく，年齢層が若いほど高い値を示している。「中堅層」が学生時代を過ごしていたのがバブル崩壊以前であるにもかかわらず「ベテラン層」よりも高い値を示しているのは，大学進学率の高まりによって，低所得層の家庭にも大学進学の機会が開かれたことが関係しているのではないかと推察される。

表5．高校教員の学生時代の日常生活（年齢層別）

	ベテラン層	中堅層	若手層		教員志望学生
専門書をよく読んだ	78.5	68.9	84.0		55.0
最新の流行はすぐに取り入れていた	7.4	25.3	16.0	**	19.9
大学をやめたいと思うことがあった	16.5	9.7	14.0		19.8
経済的に大学に通い続けることが難しかった	12.8	14.9	18.0		13.0

注：値は肯定的な回答（「とてもあてはまる」＋「少しあてはまる」）の割合。以下，同様に表記。

なお，参考までに「教員志望学生」の値を示したのが表5右側である。高校教員に対する調査では第2節で示したように4段階でたずねているのに対し，学生に対する調査では5段階でたずねているため，「どちらでもない」を母集団から除いた上での回答の割合を示している。また，「教員志望学生」はあくまで教員を志望している学生であるから，高校教員を志望している学生では必ずしもないし，教員採用試験を合格した学生でもない。そのため，両者を厳密に比較することはできな

いが，こうした点に留意しながら，特に「若手層」との比較を行いたい。

まず，「教員志望学生」は，「若手層」に比べれば，そうまじめではないという傾向がうかがえる。すなわち，「専門書をよく読んだ」に肯定的な回答をしたものの割合は，「若手層」よりも「教員志望学生」で低い値を示しており，値の開きも大きい。一方，「最新の流行はすぐに取り入れていた」に肯定的な回答をしたものの割合は，「若手層」よりも「教員志望学生」で高い値を示している。こうした結果には，先述の留意点の中でも，特に「教員志望学生」が教員採用試験を合格した学生でないことが大きく関係していると推察される。

また，「教員志望学生」は，「若手層」に比べれば，経済面以外の要因でキャンパスライフを送ることに困難を抱えているという傾向がうかがえる。すなわち，「経済的に大学に通い続けることが難しかった」に肯定的な回答をしたものの割合は，「若手層」よりも「教員志望学生」で低い値を示しているにもかかわらず，「大学をやめたいと思うことがあった」に肯定的な回答をしたものの割合は，「若手層」よりも「教員志望学生」で高い値を示しているのである。「教員志望学生」が経済面以外のどのような要因でキャンパスライフを送ることに困難を抱えているのかという点は非常に興味深い問題ではあるが，データの制約上これ以上の分析は不可能であるため，他日を期すこととしたい。

５－２．大学の授業に対する意識・態度

次に，高校教員の学生時代の大学の授業に対する意識・態度が，年齢層によってどの程度異なるのかについて検討したい。表６には，高校教員の学生時代の大学での授業に対する意識・態度と年齢層とのカイ二乗検定を行った結果を示している。いずれの項目についても有意差が確認できないことから，高校教員の学生時代の大学の授業に対する意識・態度に，年齢層による大差はないといえる。しかし，前項と同様に，以下ではあえて年齢層による傾向を抽出してみたい。

表６からも，「中堅層」の教員が，「ベテラン層」や「若手層」の教員に比べ，学生時代，そうまじめではなかったという傾向がうかがえる。すなわち，「授業はできるだけ休まないようにしていた」「成績はできるだけＡ（優）を取ろうとしていた」に肯定的な回答をしたものの割合は，「ベテラン層」や「若手層」よりも「中堅層」で低い値を示している。一方，「授業中に私語をすることが多かった」に肯定的な回答をしたものの割合は，「ベテラン層」や「若手層」よりも「中堅層」で高い値を示している。ただ，「卒業に必要無い授業は履修しないようにしていた」に肯定的な回答をしたものの割合は，「ベテラン層」や「若手層」よりも「中堅層」で低い値を示しているわけではなく，年齢層が若いほど高い値を示している。こうした結果は必ずしもネガティブな意味合いをもつものではないだろう。なぜなら，先述のように，「若手層」が学生時代を過ごした1990年代は，高校教員の競争率が高まっていく時期であり，学生はそうした状況下で少しでも採用条件を有利にするために少しでも高い成績を取ろうと，「卒業に必要無い授業は履修しないようにしていた」とも考えられるからである。

また，「中堅層」の教員は，「ベテラン層」や「若手層」の教員に比べれば，学生時代，大学の授業を肯定的に捉えていなかったという傾向もうかがえる。すなわち，「大学の授業では幅広い知識を得られたと思う」「授業で考え方が変化したことがあった」に肯定的な回答をしたものの割合は，「ベテラン層」や「若手層」よりも「中堅層」で低い値を示している[3]。一方，「大学の授業は役に立たないと思っていた」に肯定的な回答をしたものの割合は，「ベテラン層」や「若手層」よりも「中堅層」で高い値を示している。こうした結果も，「（「中堅層」が学生時代を過ごした1980年代は）高校教員を志望する学生であっても学習に対する関心は低かったのではないか」という前節の言及を支持する結果であるといえよう。

表６．高校教員の学生時代の大学の授業に対する意識・態度（年齢層別）

	ベテラン層	中堅層	若手層	教員志望学生
授業はできるだけ休まないようにしていた	80.8	70.8	84.0	85.5
成績はできるだけA(優)を取ろうとしていた	67.3	62.4	74.0	58.7
授業中に私語をすることが多かった	2.7	9.0	6.0	45.6
卒業に必要無い授業は履修しないようにしていた	14.6	18.8	24.0	45.4
大学の授業では幅広い知識を得られたと思う	74.4	70.2	74.0	76.1
大学の授業では専門的知識を得られたと思う	89.9	89.6	80.0	94.9
授業で考え方が変化したことがあった	66.1	62.3	66.0	92.6
大学の授業は役に立たないと思っていた	17.4	22.7	18.0	23.7

なお，「教員志望学生」の値を示したのが表６右側である。先ほどと同様の理由で，両者を厳密に比較することはできないが，先述の点に留意しながら，特に「若手層」との比較を行いたい。

まず，この結果からも，「教員志望学生」は，「若手層」に比べれば，そうまじめではないという傾向がうかがえる。すなわち，「授業はできるだけ休まないようにしていた」に肯定的な回答をしたものの割合こそ同程度であるものの，「成績はできるだけＡ（優）を取ろうとしていた」に肯定的な回答をしたものの割合は，「若手層」よりも「教員志望学生」で低い値を示している。一方，「授業中に私語をすることが多かった」「卒業に必要無い授業は履修しないようにしていた」に肯定的な回答をしたものの割合は，「若手層」よりも「教員志望学生」で高い値を示しており，前者については値の開きも大きい。こうした結果も，先述の留意点のうち，特に「教員志望学生」が教員採用試験を合格した学生でないことが大きく関係していると推察される。

また，「教員志望学生」は，「若手層」に比べれば，大学の授業を肯定的に捉えているという傾向がうかがえる。すなわち，「大学の授業は役に立たないと思っていた」に肯定的な回答をしたものの割合こそ，「教員志望学生」よりも「若手層」で低い値を示しているものの，「大学の授業では幅広い知識を得られたと思う」「大学の授業では専門的知識を得られたと思う」「授業で考え方が変化したことがあった」に肯定的な回答をしたものの割合は，「若手層」よりも「教員志望学生」で高い値を示している。こうした結果には，先述の留意点は大きく関係していないのではないだろうか[4]。むしろ，先述の効率性や実効性を高めるための多様な教育改革が推し進められた結果として，大学の授業が「教員志望学生」に肯定的に捉えられるようになってきているのではないかと推察される。

５－３．大学教員との関わり

最後に，高校教員の学生時代の大学教員との関わりが，年齢層によってどの程度異なるのかについて検討したい。表７には，高校教員の学生時代の大学教員との関わりと年齢層とのカイ二乗検定を行った結果を示している。いずれの項目についても有意差が確認できないことから，高校教員の学生時代の大学教員との関わりに，年齢層による大差はないといえる。しかし，これまでと同様に，以下ではあえて年齢層による傾向を抽出してみたい。

表７をみると，授業中の関わりには年齢層による差はほとんどみられないが，授業以外の場所での関わりには年齢層による差がみられる。すなわち，「授業以外の時に，教員と研究や学問の話をした」に肯定的な回答をしたものの割合は，年齢層が高いほど高い値を示している。一方，「大学教員と一緒に食事やお酒を飲みに行った」「勉強や進路以外の生活の悩みについて大学教員に相談をした」に肯定的な回答をしたものの割合は，「ベテラン層」や「若手層」よりも「中堅層」で高い値を示している。

このように，「ベテラン層」の教員は，「中堅層」や「若手層」の教員に比べ，授業以外の場所で，研究や学問の延長線上での関わりをもっていたのに対し，「中堅層」の教員は，「ベテラン層」や「若

手層」の教員に比べ，授業以外の場所で，プライベートの領域での関わりをもっていたという傾向がうかがえる。なお，「若手層」の教員は，「ベテラン層」や「中堅層」の教員に比べれば，授業以外の場所での関わり自体が少なく，特に研究や学問の延長線上での関わりは少なかったようである。

こうした年齢層による差には，当時の学生が，研究や学問の場として大学をどの程度認識していたかが大きく関係していると考えられる。すなわち，「ベテラン層」が学生時代を過ごした1970年代は，先述のように「それまでまがりなりにも学習に向けられてきたエネルギーが余暇的生活に向けられることになった時期」であったとはいえ，当時の学生は，その後の時代の学生に比べれば，研究や学問の場として大学を認識していたと考えられる。だからこそ，「ベテラン層」の教員は，大学教員と授業以外の場所で，研究や学問の延長線上での関わりをもつことが比較的多かったのだろう。そして，大学進学率が高まり，研究や学問の場としての大学の認識が弱まるにつれ，「中堅層」や「若手層」の教員は，研究や学問の延長線上での関わりをもつことが少なくなっていったのだろう。その一方で，「中堅層」の教員が，プライベートの領域での関わりをもつことが多くなっていったのは，「中堅層」が学生時代を過ごした1980年代が，先述のように「学生が学生生活を謳歌すべく正課外の活動に多くの時間をあて，本分であるはずの学習に対して真剣に取り組まなくなっていった時期」にあたるためであると考えられる。

表７．高校教員の学生時代の大学の教員との関わり（年齢層別）

	ベテラン層	中堅層	若手層	教員志望学生
授業中に、大学教員に質問をした	51.4	48.1	50.0	28.1
授業以外の時に、教員と研究や学問の話をした	72.4	68.2	54.0	41.1
大学教員と一緒に食事やお酒を飲みに行った	69.7	74.7	70.0	20.2
勉強や進路以外の生活の悩みについて大学教員に相談をした	17.4	22.0	16.0	16.8

なお，「教員志望学生」の値を示したのが表７右側である。先ほどまでとは異なり，学生に対する調査も４段階でたずねている。しかし，やはり「教員志望学生」はあくまで教員を志望している学生であるから，高校教員を志望している学生では必ずしもないし，教員採用試験を合格した学生でもない。そのため，こうした点に留意しながら，特に「若手層」との比較を行いたい。

この結果をみると，「教員志望学生」は，「若手層」に比べ，総じて大学教員との関わりが少ないという傾向がうかがえる。すなわち，「勉強や進路以外の生活の悩みについて大学教員に相談をした」に肯定的な回答したものの割合こそ同程度であるものの，「授業中に，大学教員に質問をした」「授業以外の時に，教員と研究や学問の話をした」「大学教員と一緒に食事やお酒を飲みに行った」に肯定的な回答したものの割合は，「若手層」よりも「教員志望学生」で低い値を示している。特に「大学教員と一緒に食事やお酒を飲みに行った」については値の開きも大きい。

ただし，調査時点が３年次の 11 月から２月にかけてであることには留意したい。すなわち，大学教員との関わりがもっとも深くなるのが４年次であるとするならば，「「教員志望学生」は大学教員との関わりが少ない」と一概に論ずることはできないだろう。

6．おわりに

本稿では，高校教員を対象とした調査に基づき，高校教員が学生時代にどのようなキャンパスライフを送っていたのかについて，特に日常生活，大学の授業に対する認識・態度，大学教員との関わりの三点から明らかにした。分析の結果得られた主要な知見は以下の通りである。

第一に，サンプル全体で回答傾向を概観した結果，高校教員は学生時代，キャンパスライフを比較的順調に過ごしていたこと，また，非常にまじめであり，大学の授業も非常に肯定的に捉えていたこと，大学教員と授業以外の場所での関わりを比較的もっていたことが明らかになった。

第二に，大学進学率と教員採用試験の競争率の推移を概観しながら，各年齢層の高校教員が学生時代におかれていた時代状況について整理した結果，「中堅層」が学生時代を過ごした1980年代は，高校教員を志望する学生であっても学習に対する関心は低かったのではないかと推察された。

第三に，年齢層別の分析を行った結果，「中堅層」の教員は，「ベテラン層」や「若手層」の教員に比べ，学生時代，キャンパスライフを比較的順調に過ごしていたこと，また，そうまじめではなく，大学の授業も肯定的に捉えていなかったこと，大学教員とは授業以外の場所で，プライベートの領域での関わりをもっていたことが傾向としてうかがえた。

ただし，最後の点で留意したいのは，高校教員の学生時代の日常生活，大学の授業に対する認識・態度，大学教員との関わりに，年齢層による大差はほとんどないという点である。本稿では，それをふまえた上で，あえて年齢層による傾向を抽出し，その結果を示しているにすぎない。つまりは，サンプル全体で回答傾向を概観した結果と同様に，年齢層にかかわらず，高校教員は総じて学生時代，キャンパスライフを比較的順調に過ごしており，また，非常にまじめで，大学の授業も非常に肯定的に捉えており，大学教員と授業以外の場所での関わりも比較的もっていたのである。

このように，年齢層にかかわらず，高校教員は学生時代，非常に優等生的な存在であったのだといえよう。先述のように，現在，多様な教育改革が加速度的に推し進められており，教員採用試験の競争率が依然として高い水準にあることに鑑みれば，今後もこうした傾向は続いていくであろう。注目すべきは，教員養成課程の期間が延長された場合，そのインパクトがどのように及ぶのかという点である。教員養成課程の期間が延長されれば，先述のように，経済的負担増に伴い，教員を志望する学生は減少するであろう。経済的負担増にもかかわらずそれでも教員を志望するような学生は，本稿でみてきた高校教員の学生時代よりも優等生的である可能性が高いのではないだろうか。すなわち，同質化（純化といってもよいかもしれない）傾向が強まるのではないかと推察される。

こうした点に鑑みれば，教員養成課程の期間の延長は，「資質の低下」というよりも「資質の偏り」を招くのではないかと考えられる[5]。優等生化のベクトル上で「資質の偏り」が生じるということは，捉えようによっては，教員として望ましい性格や態度を備えた教員が増えていくとみることもできよう。しかし，それがゆえに，深刻さの度合いを増している教員のバーンアウト[6]をさらに加速させていくことは十分に考えられる[7]。混迷を極める教育現場に対する処方箋のつもりが，逆に教育現場をさらなる混乱に陥れることのないよう，教員養成課程の期間の延長については引き続き慎重な議論が求められる[8]。

注

1) また，南ら（2009）は，小・中学校教員を対象とした調査に基づき，「教師の多くは，勉強やサークル活動に熱心に取り組み，友達が多いといった学生時代を送り，そのことに比較的満足している」（南ほか 2009: 34 頁）ことを明らかにしている。

2) 山崎（1998）は，1986 年度以降，毎年のように競争率が上昇を続けているのは，採用者数の長期低落とバブル後の不況による民間就職の不振の結果であると分析している。
3) ただし，「大学の授業では専門的知識を得られたと思う」に肯定的な回答をしたものの割合は，「中堅層」よりも「若手層」で低い値を示しているという点には留意しなければならない。
4) 「どちらでもない」を母集団から除く前の回答の割合をみてみると，「大学の授業では専門的知識を得られたと思う」「授業で考え方が変化したことがあった」に肯定的な回答をしたものの割合はそれぞれ 85.3%，79.1%であった。すなわち，５段階でたずねた調査結果であるにもかかわらず，４段階でたずねた「若手層」の結果を上回る値が得られているのである。
5) もちろん，「資質の偏り」を含む意味でも「資質の低下」は議論されている。
6) 2009 年度の全国公立学校教職員の精神疾患による休職者は 5,458 人であり，20 年間で５倍にも増加している。精神疾患での休職者数を教員総数で除した「休職者出現率」は 0.60%であるという（「「精神疾患で休職」5458 人」『朝日新聞』2010.12.25）
7) 新井 (2006) は，教員として望ましい性格や態度がバーンアウトを引き起こすと指摘している。すなわち，バーンアウトに陥りやすい教員のパーソナリティーの特徴として，(1)ひたむきで，多くの仕事を熱心に完遂させようとし，達成できないと，そのことに深く悩む人，(2)妥協や中途半端を嫌う完璧主義的傾向の強い人，(3)理想主義的情熱に駆り立てられる人，の三点を挙げている。
8) なお，本稿執筆後の 2010 年末，中央教育審議会の特別部会は，教員免許に関する制度改革案を了承した。改革案では，大学院などで学んだ修士レベルの学生には「一般免許状」を与えることとする一方で，そうでない学士レベルの学生には「基礎免許状」を新設することで，大学院で学ばなくても教員になれる道を残した。

参考文献

新井肇，2006「もうやってられないと言えば様になる？早期退職に逃亡のにおいすー定年を前に教壇を去った教師へのインタビューからー」『月刊生徒指導』２月号，23-31 頁。

葛城浩一，2005「教職課程履修者の学生文化の特徴ー非教員養成系学部を中心にー」広島大学大学院教育学研究科教育社会学研究室編『教育社会学研究年報』第８号，19-27 頁。

南学・青井倫子・西本佳代，2009「教師のキャリア形成」藤井泰・山田浩之編『地域社会における教師の仕事と生活』松山大学地域研究センター叢書，第７巻，27-35 頁。

山崎博敏，1998『教員採用の過去と未来』玉川大学出版部。

吉澤茉帆・尾川満宏・山田浩之，2010「教員のキャリア形成に関する教育社会学的研究」中国四国教育学会第 62 回大会（香川大学）配布資料。

Abstract

A Study of High School Teachers' College Life:

Differences between Generations

Koichi KUZUKI

Center for Research and Educational Development in Higher Education, Kagawa University

Based on a research study of high school teachers, this paper explores how they spent their college life, and focuses on their daily lives, recognition and attitude toward college coursework and relations with their university teachers.

First, this paper found that the high school teachers successfully spent their college life. They had a positive understanding and attitude toward college coursework, and developed meaningful relations with their university teachers even outside of class. Secondly, unlike the junior-level or experienced teachers, the mid-level teachers tended not to be so motivated to their study. In the 1980's when the mid-level teachers were university students, even some of the students wishing to become high school teachers were not encouraged to study hard. Thirdly, compared to the junior-level or experienced teachers, the mid-level teachers successfully spent their college life, but did not have a positive understanding or attitude toward college coursework. On the other hand, they developed close relations with their university teachers even outside of class. Lastly, this paper emphasizes the point that regardless of their age, high school teachers had similarly college life tendencies. That is, their college life was comparatively successful: they were enthusiastic about their study, and achieved favorable relationships with their university teachers even outside of class.